

<ご挨拶>

阿部年晴(NPO 法人ことば村・世界言語博物館理事長)

「地球ことば村」の一員として、このシンポジウムに何を期待するか、皆さんと一緒に何を考えたいかを、述べさせていただきます。

大学や関連学会も、これと似た内容のシンポジウムを開いています。その中に、素人である市民が主体の「地球ことば村」が参入する意義は何かと問われるかもしれません。その問いにお答えするには、私たちの団体の性格をお話しするところから始めるのが一番いいだろうと思います。

地球ことば村の活動には二本の柱があります。ひとつは、国内の方言を含む世界の少数話者言語とその話者に関する情報を、主として一般市民に提供すること、もうひとつは、そういう言語の話者や研究者など関係者に直接会って対話を重ねていくこと、その二本です。地球ことば村のメンバーはどのような人たちかというと、ことばに対して強い関心と旺盛な好奇心を持っている市民です。それ以外の面では、思想信条も趣味もバラバラですが、ひとつ共通の特徴があるとすれば、生活者として、生活の中のことばに関心を持っているということでしょう。そういう市民の活動に多くの研究者がメンバーとして協力してくださっています。私たちの活動は研究者のネットワークに支えられています。少数言語を話す話者、研究者、一般の市民、この三つを結ぶことが私達の団体のねらいのひとつです。活動の目的は、ことばに対する好奇心を満たすと同時に、異なる言語を母語とする人びとの間に、生活の場での豊かなコミュニケーションを実現することです。

具体的な活動の例を一つだけ挙げますと、先々回の「ことばのサロン」ではアイヌの女性を招いて話を聞きました。50歳近くなってからアイヌ語の勉強を始めた方です。なぜその年齢になってからアイヌ語を学び始めたのか、ご自分の人生を振り返っての切実な話の後、大変率直な話し合いが行われました。これは「地球ことば村」らしいサロンだったと思いますが、そういう活動を通して、異なる言語を母語とする人びとが共生するためのセンスと作法を生み出すことに貢献したい、そのための場、そのための拠点をつくりたいというのが私たちの思いです。

付け加えておきたいのですが、私たちの活動の前提になっているのは、少数話者言語をめぐる問題は私たちふつうの市民にとって、「他人ごと」ではない、という考えです。明治維新以降の日本の近代化を考えると、政府が主導してこの列島の内外にたくさんあった言語を抑圧したり排除したりしながら、強力に標準語を作っていったプロセスを経て今日の私たちの社会があるわけです。少数話者言語というと、どこか浮世離れしたようなものと思いがちですが、けっしてそうではない、ということです。

そういう考えに立って、2008年度にシンポジウム「日本語とその隣人たち―身近な危機言語とその文化」を開催しました。少数話者言語の話者と研究者に来ていただいて、話を

聞き、ディスカッションしました。それを受けて2009年度には「ことばのサロン」で「ことばの復興シリーズ」を企画し、数回にわたって世界各地の言語復興運動、再活性化運動を取り上げてきました。今日のシンポジウムはそういう活動を踏まえて企画されたもので、現代日本におけるさまざまな少数話者言語の状況とそれをめぐる運動を取り上げるシリーズの第一回目です。

最後になりましたが、このシンポジウムで皆さんといっしょに考えたいのは、次のようなことです。

ひとつは、「顔の見える隣人」としての当事者が置かれている状況や、その人たち自身の考えや活動を知りたい。どんな願いを持ち、どんな困難を抱えているのか、それを知りたいというのが第一点です。次に、そのことを私たち自身の生き方や生活と結びつけたい。異なることばを話す「隣人たちとの関係」の問題として、私たち自身の問題として受け止めるには何が必要か、そのヒントを探したいと思います。さらに、言語再活性化の運動を私たちの社会・日本全体の問題として受け止めるにはどう考えていったらいいのか。これまで重ねてきたサロンを通じて、少数話者言語とその再活性化が、それぞれの社会の政治的・経済的構造といかに密接に関係しているかを具体的に知ることができました。そうなると言語政策の問題を避けて通れないということで、「言語政策」を主題のひとつとして取り上げました。

今日の議論を踏まえて二回目以降を企画し、みなさんに引き続きご参加いただき、何らかの提言を行うところまでもっていきたいと思っております。どうかよろしく願いいたします。